

野沢 和弘

特別支援教育研究センター主催セミナー（平成19年3月実施）で行いました毎日新聞社 野沢和弘氏の講演「情報とユニバーサルデザイン」の概要を掲載いたします。

はじめに

私は、毎日新聞の社会部のデスクをやっております。私の長男は20歳になりますけれども、重度の知的障害と自閉症です。その関係で、親の会である全日本手をつなぐ育成会というところで、権利擁護委員会ですとか障害者のための新聞を作る活動などを手伝っております。

障害者と情報社会

私は、情報を取り扱う仕事を普段していますが、情報ということをよく考えてみますと、昔は、目の不自由な方が、例えば遠隔地の人と手紙とか電報とかで情報のやりとりをしている時は大変不便だっただろうと思うんです。それが、電話が普及してきて電話でのやりとりが情報伝達の主な手段になってくると、目の不自由な人はとても便利になったはずなんです。ところが逆に、電話が主流になったがために不便だという方が出てくるわけです。それは誰かという、耳の不自由な方たちですね。手紙や電報でのやりとりが主流だったときには、耳の不自由な人たちは、ほかの方たちと何も差別もされずに情報伝達できていたはずなんですけれども、電話が主流になってくるとそうではなくて、耳の不自由な方たちにとっては、非常に疎外されている状況が出てきたのではないかなというふうに思います。さらに最近では、パソコンとかメールとかで瞬時の間に時間と空間を飛び越えて大量の情報がやりとりされるようになると、今度は耳の不自由な方たちはとても便利ですね。あっという間に目の前のパソコンの画面に必要な情報が飛び込んでくるわけです。そうすると、今度はまた逆に目の不自由な方たちが不便な思いをします。最近は音声対応型パソコンが出てきましたので、そうしたことも回復されているというふうに思います。

ところが、こうした技術の進歩の中で我々の、私の子供のような知的障害の人たち、あるいは自閉症、自閉症は多少違うと思いますが、知的障害の方たちにとっては相変わらずこうした情報のやりとりからは、何となく疎外されているということが続いてきているので

はないかなと思っています。

今、日本もようやく知的障害の方たちにとっては、閉鎖的な入所施設での暮らしから、地域で普通に暮らそうと、ノーマ・ライゼーションの動きが始まりつつある状況ではないかと思います。政府が障害者基本計画の中で、真に必要な場合を除いて、もう入所施設をつくらないというふうに明記したのは2001年だったと思いますが、そのころからそれまでずっと、やっぱり日本では我々のような重度な障害児を持つ親たちの願いが原動力となって入所施設を作り、その中で知的なハンデを持った人たちが生活をするというようなニーズが続いてきたと思いますが、ようやく地域での暮らしが主流になりつつある、そういう兆しが見られてきたというのが今の日本の状況だと思います。そうしたときに、地域で暮らしていくためには何が必要なのか。いろいろな福祉サービスが必要です。ホームヘルプだとかガイドヘルプだとかグループホームなどですね。あるいは働くということも必要ですし、余暇活動とか友だちとか恋愛、あるいは結婚というようなことも必要かと思いますが、その時に一番大事なのは、本人が自らいろんなことを、情報を仕入れて自分の選択というものをしていかなければいけない、その時に情報が、今のような状況ではどうにもならないのではないかなということ、いろいろな人が言い出してきています。

新聞「ステージ」の刊行

育成会の世界大会がありまして、そこに90年代の初めから半ばごろに本人たちも日本から参加するようになって、95年から96年だったと思いますが、その世界大会を聞いた本人や育成会関係者たちが帰ってきて、非常に興奮しているわけです。本人というのは障害があるご本人ですけれども、「スウェーデンは知的障害者のための新聞が発行されている」と言うんです。タブロイド判で8ページの薄い新聞ではありますけれども、ここには知的なハンデを持った人たち、大体IQが70から70以下で、かつ文字情報にある程度なじみのある、

こういう特性を持った人たちですけれども、こういう障害者向けの新聞が発行されているんですね。

その声を受けて、全日本育成会の職員の人たちが、私のところにやってきました。「日本でもこういう知的障害者向けの新聞を発行してくれ」と言うんです。「毎日新聞では点字新聞を発行しているじゃないか」と。私の勤めている毎日新聞には歴史が70年とか80年とかある『点字毎日』という目の不自由な方たち向けの新聞を発行しています。「目の不自由な人の新聞を作っているんだから、知的障害の人のための新聞も作ってくれ」と言うんですね。私はいろいろな上司とか、社内のいろいろな関係者に引き合わせて会社としてなんとかできないだろうかと持ちかけたんですけれども、上司が困ったような顔をして「じゃ、検討しようか」ということを言ってくれて、育成会の人たちが帰ったあとで「『点字毎日』が一体どれくらい赤字を出しているのか君は知っているのか」と言われました。さらに知的障害の人たちのための新聞が絶対にビジネスになるわけがないと、それはちょっと難しいよということなんですね。そういうわけで、育成会の人たちには断ったんですけど、「本人たちのためにやっぱり作りたい」と言うんですね。「野沢さん、あなた協力してくれよ」、「資金はいろんな助成団体が集めるので新聞作りに協力してくれ」と。何となく断ることができなくてこの仕事を引き受ける羽目になったというのが今から11年前、1996年のことでした。その時、毎日新聞から発行することはできないけれども、協力することはやぶさかではないということで、新聞の輪転機をただで使わせてくれたんです。それと、今新聞社内にあるデータベースの中に入っている写真ですね。写真もただで使っていい（笑い）と言うんですね。働いている記者もただで使っていいと言うことで、何人かのスタッフと言いますか、同僚に協力してもらって始めました。

創刊が1996年の9月です。新聞とは言っても、そんなにたくさんお金もないし、人もかけられないので、出せるのは年に4回だけです。春夏秋冬ですね。ですので、その3カ月分の出来事を新聞にして出します。これを作るには、なんと知的障害の本人たちも編集委員になって入っていただきました。彼らと支援者と我々プロの新聞記者のコラボレーションなんです。最初に向こうから言われたのは、「障害者だからと言って子供扱いするのはやめてくれ」ということです。しかも「福祉っぽいような内容は嫌だ」と言うんです。つまり障害者関連のいろ

んな情報誌というか機関誌を見ると、大体福祉の制度の説明ですとか、どこでどんな会が活動しているのかという紹介とか親の気持ちだとか、本人の絵を載せてみたりだとか、そういうことをやっていますけどそうじゃないと言うんです。「我々はこれから地域で、社会で暮らしていかなければいけないので政治の話に興味がある。経済の話だって知りたい。もちろん恋愛とかセックスとか、そういうことも当然興味がある。科学の次は環境の記事なんかも読みたい」と言うんですね。

そこで我々は議論を重ねました。ただし、そうした難しい政治や経済や科学の記事であっても、知的レベルでいうと、小学校3年生ならば分かるような内容にしてほしいと言うんですね。これは大変難しいことでした。私たち新聞記者が入社してすぐに言われるのは、義務教育を卒業した人ならば、誰が読んでも理解できる文章にしろさいということを経験で学ばされます。難しい言葉や難しい言い回しはするなということですね。易しく易しく書け。だから易しい文章を書くのは、自分たちはプロだというふうに思っているんです。ただし、新聞記事を読んで皆さんは普段どんな感想をもたれるかというと、私は新聞記事というのはとても難しい文章だと思うんです。自分で読んでいても分からないもののがかなりあります。この障害者のための新聞『ステージ』を作った11年の経過の中でいろいろなことに気がつくようになりました。なんで新聞記事は難しいのか、小学校の3年生ぐらいの知的レベルの人にも分かってもらえる記事は一体どうすればできるのかということをいろいろ考えてみたわけなんです。その中にはいろいろな法則といいますかルールというものを少しずつみんなの中で共有することができましたし、ただ、それだけではちょっと違うんじゃないかなと思える部分も結構あるんですね。

新聞「ステージ」の記事は① 宮崎県知事選

これは一番最近作った新聞記事です。実際に載った記事です。最初は宮崎県知事選、そのまんま東さんが当選しましたけれども、その記事を『ステージ』で取り上げました。これは実際に新聞に載った新聞記事の冒頭の部分です。細かい字で読みにくいと思うのでちょっと読み上げてみますと「宮崎県の官製談合事件で前知事の安藤忠恕被告、65歳が辞職したことに伴う出直し知事選は、21日投票開票され無所属新人で元タレントのそのまんま東氏（49歳）、＝本名・東国原英夫＝が初当選した。高い知名度のある東氏は無党派層や若年層などから幅広い

支持を集め、前林野庁長官の川村秀三郎氏（57歳）ら新任4人に圧勝した。県民は行政・政治経験のない東に県政刷新を託し、事件で指摘された官民癒着やしがらみからの決別を強く求めた」というのが、実際に新聞に載っている記事の冒頭部分なんです。これは知的障害の人たちにとって、多分分からない、何となく分かるけどすごく読みにくいはずなんです。我々から見ても読みにくいんです。

なぜかという一つの文章が非常に長いんです。割と難しい字が凝縮されて使ってある、まず最初の文章でも、「宮崎県官製談合事件で前知事の安藤忠恕被告が辞職した」という事実と、「出直し知事選が21日に投開票された」という事実と、「無所属新人で元タレントのそのまんま東氏が当選した」という3つの事実が全部つなげてあるんです。なぜ、こういうふうにつなげるのかというと、新聞は情報量がどんどん少なくなっているからです。というのは、文字が大きくなっています。昔、我々が入社したときには1行15文字だったのが、朝日新聞が最初に12文字にしたんですかね。本当にびっくりしました。その次にすぐに毎日新聞だとかほかの新聞が、今度は11文字にしたりですね。最初は15文字だったのが11文字に減っているんですね。しかもそれに伴って写真が大きくなっていたり、見出しが大きくなっているんです。昔の新聞と見比べてみると歴然です。ただし、盛り込むべき記事の本数だとか情報量というのは落としてはいけないということをみんな考えていますので、じゃ、どうするのかというと全部つなげてしまうんです。つなげると、接続詞だとか丸とか点だとか、あるいは主語が節約できる、そういった理由で長いんです。

『ステージ』を作るときには、まず記事を分解します。「宮崎県の官製談合事件で、安藤忠恕前知事が辞職した」「後任を選ぶ出直し知事選が21日投開票された」「そのまんま東氏が初当選した」「東氏は無所属新人で元タレントだ」こういうふうにいえばいい。ばさばさばさと事実だけに分解します。そうすると、割と小学校3年生ぐらいのレベルでもついて行けるようになってくるかなと思うんです。その次の文ですね。「東氏は高い知名度がある」「東氏は無党派層や若年層などから幅広い支持を集めた」「東氏は前林野庁長官の川村秀三郎氏ら新任4人に圧勝した」の3文になります。

ただし、短くしただけでは駄目なんです。この中に難しい単語がいっぱい出てきます。例えば「官製談合事件」「無所属新人」「無党派層」「県政刷新」「官民癒着」、

戒名みたいですけどね。最初は官製談合事件というのを説明しなきゃいけないと思うんですけども。小学校3年生に官製談合事件というのを説明するのはとっても難しいんです。いろいろ考えた結果、これはあきらめました。無党派層というのは、自民党とか民主党とか大きな政党に入っていないということ、こういうのを全部やさしい言葉に変えます。もちろんニュアンスは変わってきます。変わっていきますけれども、やさしい言葉に分けて置き換えるんですね。次の段階として。だけどそれだけでは知的障害の人たちには分かりやすい記事にはならないんです。なぜかという、何がこのニュースのポイントなのかというのをこちらの送り手側がきちんと押さえておく必要があります。読者、障害がある人、あるいは小学3年生ぐらいの知的レベルの人たちに伝えていくというのは、全部が全部、同じトーンで伝えるというのはなかなか難しいので、ポイントを絞るわけです。そうすると、そのまんま東というのはなんなのかですね。そのまんま東と東国原英夫ですね。大体この2人というのはどういう関係なのかというのを説明しないといけない。それと、タレントとか無党派がなぜこの保守王国の宮崎でこういうことになったのかというのは一つのポイントです。なぜ我々はこのニュースに注目しているのかというあたりが少し障害のある人たちに伝わると、このニュースの背景だとかポイント、コンセプトが分かるんじゃないかなと思います。実際の『ステージ』の記事はこうです。「ビートたけしの弟子でタレントの」そこでまず、そのまんま東が何なのかというのを説明するわけです。こうした導入部で、大体誰もがあのそのまんま東だよねということを思い浮かべるんです。「そのまんま東さんが宮崎県知事になりました。」これだけですむわけですね。その後で「自民党や民主党などの大きな政党が支持したほかの候補に大差をつけての勝利でした。」次が重要ですね。「そのまんま東さんは本名を東国原英夫といいます。知事になってからは東国原知事として活動しています。」その次が、「前の知事が官製談合という悪いことをさせていたために逮捕され」、この官製談合というのを説明するのができないので、悪いことをさせたために逮捕されということと説明しちゃうんです。これはちょっと強引で、本当はきちんと説明しなきゃいけないんだけど、政治不信だとか県政刷新というのを次のように言います。「県民は政治が信じられず怒っていました。タレントの東国原さんは政治家としてどれくらい力があるか分かりませんが、宮崎を変えようと訴えまし

た。ここが県民に期待されたのだと言われています。」
こういう記事です。

新聞「ステージ」の記事は② 安倍内閣の不祥事

もう一つ、安倍内閣を巡るいろいろな不祥事です。本間会長の辞任ですね。その記事を読みます。「政府税制調査会（首相の諮問機関）の本間正明会長は、21日、国家公務員宿舎に知人女性と同居していると報じられた問題で混乱を招いた責任を取り、会長職を辞任する意向を安倍晋三首相に電話で伝えた。」非常に長いですね。「本間氏は03年1月に東京都渋谷区内の国家公務員宿舎に入居した。12月11日発売の週刊誌で、家族ではない親しい女性と公務員宿舎に同居していたと報じられ、宿舎売却の旗振り役が自ら安い家賃で入居しているのはおかしいと批判が高まっていた」とある。ものすごく分かりやすい記事なのに、新聞記事を見るとすごく難しい記事になっちゃうんですね。長いですし、易しい言葉をわざわざ難しい言葉に言い換えているんですね。例えば、記事を分解してみます。「政府税制調査会（首相の諮問機関）の本間正明会長が21日辞任した」「国家公務員宿舎に知人女性と同居していると報じられた問題で混乱を招いた責任を取った」「安倍晋三首相に電話で辞任を伝えた」「本間氏は03の1月に東京都渋谷区内の国家公務員宿舎に入居した」「12月21日発売の週刊誌で報道されました」とこういうふうに分解できるんです。難しい言葉はこれですよ。「政府税制調査会」「国家公務員宿舎」「家族ではない親しい女性」これは難しいですね。これを小学校3年生に分かるように伝えなきゃいけないわけです。この記事ですが、本間さんというのは何者なのかというのがきっちと分からないと、なぜ辞任しているのか分からないんです。しかも、なぜ国家公務員宿舎に入っていたために責任を追及されているのか、ちょっと分かりません。ニュースのポイントはここですね。政府税制調査会長であること、都心の公務員宿舎ということ、親しい女性ということ、これを伝えないとなかなかこの記事の要点というのは分からないと思います。逆にこの事実さえ伝えれば、さっきの小難しい文章を並べるよりは非常に身近な分かりやすいものになるんです。

『ステージ』の記事はこうです。「税金を取られるのはしょうがないけれども、その税金を無駄に使われるのは許せない。そういませんか？」というところから始まるわけです。このニュースのポイントというのは、この最初の3行に凝縮されていると思うんです。税金の

在り方を決める責任者、それが政府税制調査会長です。「昨年10月に安倍晋三首相が誕生したとき、税制会長には本間正明さんという人がなりました。ところがこの本間さん、国のためのものである官舎に愛人を一緒に住ませていたことが分かりました」。家族ではない親しい女性というのはこういうことですね。「都心の一等地、しかも一番高い階の広い部屋です。普通なら何十万円も家賃が取られるのですが、ただ同然の安い家賃で愛人と住んでいたなんて。それで本間さんはやめました」。普段の新聞記事もこういうふうに書くととっても分かりやすいんじゃないかなと思います。「政府税制調査会長の本間正明会長は、21日国家公務員宿舎に知人女性と同居していると報じられた問題で、混乱を招いた責任を取り会長職を辞任する意向を安倍晋三氏に電話で伝えた」。これだけでも読むの疲れちゃいますよね。この辺を『ステージ』では徹底的に追求しようという新聞なんです。そうすると、なんで我々は普段こんな小難しい記事を書いているのか、逆に我々が書いている普段の記事の問題点や至らなさみたいなのが非常に浮き彫りになってくるんですね。

「佐田源一郎行政改革担当相は、27日内閣府で記者会見し、自らの政治団体の政治資金収支報告書を巡り不適切な会計処理があったとして行革担当相を辞任する考えを表明した。」「佐田氏の政治団体、佐田源一郎政治研究会、10月に解散を巡っては90から00年に事実上存在しない事務所に対し光熱水費や事務所費など計7,800万円の経費を支出したという虚偽の政治資金収支報告書を国に提出したとの疑惑が指摘されていた」と。これも長いですね。こんな長い文章だと、とてもじゃないけど普通の人でもついていけないですね。これを分解しちゃいます。そうすると「佐田源一郎行政改革担当相は、27日内閣府で記者会見した」「行革担当相を辞任する考えを表明した」「自らの政治団体の政治資金収支報告書で、不適切な会計処理があったからだ」というふうにシンプルになっていますね。さらに続けて「佐田氏の政治団体や佐田源一郎政治研究会という、その政治団体が10月に解散した。90年から00年に光熱水費や事務所費など計7,800万円の経費を支出したという政治資金収支報告書を国に提出した。事実上存在しない事務所だった。だから虚偽との疑惑が指摘されていた」というふうに因数分解するわけです。難しい言葉はこの記事にはいっぱい出てきます。「行政改革担当相」それから「政治団体」「政治資金収支報告書」「不適切な会計処理」「光熱水費や事

務所費」，これだけの難しい言葉がたくさん出てくると，これだけでももう疲れちゃって記事を読む気がしなくなりますね。ただし，これをいかに易しくしても，行政改革担当相という一体何をする大臣なのかというのが分からないと，いくら言葉をかみ砕いたって分からないんですね。それと政治資金収支報告書という，一体なぜこんなものを出さなきゃいけないのかということが分からないと駄目ですね。このニュースのポイントのところですね。それとなぜ，その収支報告書にうそを書いているのか。そこまではなかなか分からないですよ。

『ステージ』の記事だということになります。「佐田源一郎さんは，お役所が無駄な金を使わずに，しっかり仕事をするように改革する行政改革担当相という大臣でした」まずこの行政改革担当相という大臣が一体何をする，どういう責任を担ったところなのか，人なのかというところをまず書かないと，理解してもらえないと駄目なんですね。それとその次には，政治資金収支報告書のからくりですね。「大臣はどのくらい政治資金を使ったのかを国に報告しなければなりません。政治に不正な金を使わせないためのルールです。ところが，佐田さんはありません。もしない事務所に7,800万円もの家賃や電話代などが掛かったことにして報告していませんでした。一体7,800万円は何に使ったのか……，みんなから疑いの目で見られました。それで佐田さんは大臣を辞めました」。こういう記事にすると分かりやすくなると思うんですね。

それとその次の産む機械発言ですね。柳沢伯夫厚生労働相は去る27日，松江市で開かれた自民党県議の集会で講演した。講演は年金，福祉，医療問題に関するもので，出席者によると柳沢厚生相は少子化対策に言及する中で「15から50歳の女性の数は決まっている。産む機械，装置の数は決まっているから，機械というのはなんだけど，あとは一人頭で頑張ってもらわなければならないと思う」などと述べたという。これが大きな問題に発展していくわけですね。これも記事を分解しますと「柳沢厚生労働相は27日松江市で講演した。自民党県議の集会だ」「講演は年金，福祉，医療問題に関するものだ」と。「柳沢厚生労働相は少子化対策に言及した」「その以下がこういう発言だ」というふうなこういう記事に分解できる。『ステージ』ではこんなに短いんですね。「厚生労働大臣の柳沢伯夫さんは，女性は子供を産む機械と発言して世の中の女性たちからバカにしていると批判されました。野党からは大臣を辞めるべきだと言われました」これだけの短い記

事にしてしまったんですけどね。

新聞「ステージ」の記事は③ 捏造番組

それとこれですね，昨日，一昨日ですか，一昨日も最終報告書が出ましたが，テレビの捏造番組ですね，これが最初のころに出た記事です。「関西テレビ（大阪市北区）は，20，30日，今月7日にフジテレビ系で全国放送したテレビ番組『発掘あるある大事典2』で事実と異なる内容が含まれていたと発表した。納豆を食べるとダイエットができるとの内容だったが，研究者のコメントや被験者の検査データを捏造していた。関西テレビは社内に調査委員会を設け原因究明を行うとともに，過去の放送も検証し番組を継続するかを含め検討する」これが最初の記事ですね。

ところが『ステージ』は年に4回しか出せませんので，この最初の記事だけを載せていたのでは伝えきれない。その後どんどんその問題は発展してきましたので。その続報としてはこうなんです。「『発掘あるある大事典2』の捏造問題で関西テレビは28日，有酸素運動の新理論，みかん，りんごダイエットの2件で新たに捏造があることを認めた。これで関テレが問題を認めた放送は，納豆ダイエットなどを含め計4件になった。これは，総務省近畿総合通信局に提出した社内調査の報告書で明らかにした」と。この文は，新聞記事特有の特徴がでて，それは何かというと，新聞記事というのは，ものすごく文章が長いということとカッコがものすごく多いんです。まず最初の番組のタイトル『発掘あるある大事典2』，放送打ち切りにカッコありますね。それから関西テレビの所在地（大阪市北区）にありますね。その次に有酸素運動の新理論というのにカッコがあって，その次にいつ放送されたのかの丸カッコ。みかん，りんごダイエットにもカッコがついている。それがいつ放送されたのかにもカッコがつきます。またその次にも納豆ダイエットの放送日と，それから総務省近畿総合通信部の所在地，全部にカッコが付くわけですね。

新聞というのは記録性を非常に重視しますので，住所とか日付だとか，そういうものは非常にストイックにくっつけていくんです。そうすると，それを行数を取らずにものの情報を盛り込もうとすると，このカッコというのは非常に便利なんです。

それと，このニュースの前提，納豆ブームが起きていたというのがまず前提にあります。それとニュースの背景，これは視聴率を巡るテレビ局内の問題を説明しない

と、なぜこんなひどいばかばかしいねつ造が行われているのかというのがやっぱり読者に伝わらないんです。つまり、どうして納豆ブームは起きたのか。なぜテレビはねつ造するのか。ねつ造するのは視聴率を稼ぐためですけども、じゃ、なぜ視聴率は大事なのか。これがニュースの前提や背景なんです。毎日継続してきちんと読んでいる人でないと、なかなか分からないんですよ。新聞記事がなんで分かりにくいのか、難しいのかっていうやつですね。新聞はすごく重複を嫌うんです。過去に載った部分ではすごく落としちゃうんです。だから、例えば1カ月ぐらい海外に行って日本の状況を全く知らない、1か月間無縁だった人が、ある日日本に帰ってきてその日の新聞記事を読んでもほとんど訳が分からないと思います。続報、続報が多いので。その前提となっているものとか背景になっているものが全く分からないと、全然なんのニュースなのかというのが分からないと思います。これは今、新聞社内でもとても問題になっていることなんです。続報というのは要らないんじゃないかということをお前はよく言っております。ある日、全く知らない人がぱっと広げて読んでも分かるような記事にしていけないと駄目なんじゃないかということをよく言われるので。この『あるある大事典』の問題で言うと、この前提と背景をきちんと書かないと全く障害者には分からないはずなんです。

『ステージ』の記事はこういうふうになります。「どうして納豆ばかり売り切れなんだろう。どこのスーパーやコンビニに行っても納豆がないので不思議に思っていた人は多かったのではないのでしょうか」まずこの納豆ブームのところから始まるわけです。「テレビで納豆を食べるとやせると放送されたのが納豆人気になったそうで、納豆を作っている会社は大増産を始めました」これは時系列で載っているわけです。「ところがそれがうそだったのです。関西テレビ『発掘あるある大事典2』はでたらめなデータを放送し、外国人の研究者のインタビューをうその内容にして日本語に吹き替えて流しました。その前にもレタスで快眠、小豆あんこで頭を活性化などやらせで番組を作ってたのを流していたことも分かりました」。次が重要なんですね。「テレビは1秒ごとに視聴率が分かります。視聴率が高ければ企業が高いお金でコマーシャルを出してくれます。視聴率が低ければコマーシャルは決まりません。なんとか面白い番組を作って視聴率を上げようとテレビ局は競争します。うそでもいいから視聴率を上げたい……そんな気持ちになってしまう

からやらせ番組はできるのです」

テレビ局に勤めている友人に聞くと、本当に1秒おきに瞬時の視聴率が出るそうなんです。それを次の日には必ず責任者を集めて、この瞬間でなぜ視聴率が落ちたのかを徹底的に検証するというんですね。あるいは、なぜこのときにチャンネルを変えられちゃったのかとか、その辺の研究というのはものすごくやるそうなんです。だからよくコマーシャルに行く前に、予告編みたいな感じで見ている人が「えー」とアップにしてコマーシャルに変わったりとか「なんとかなんとかの衝撃の事実が！」でぱっとコマーシャルに変わったりしますよね。というのは、コマーシャルに切り替えられたときにチャンネルを変えられないようにするためだということですね。それと、誰が発言しているときに視聴率が高いのかということのも全部でと言うんです。テレビ局の職員は本当に視聴率に自分たちは追い込まれている、追いまくられているようだと言っていたんですね。こうした背景をきちんと分かりやすく伝えることこそ大切です。今のニュースだとか情報というのは、どんどんすごいスピードで変わっていったらいいですね。ホリエモンなんかはるか過去の人みたいな感じだし、村上ファンドなんかでも3年か5年ぐらい前の出来事のように思えちゃうかも知れませんが、これなんかもつい最近の出来事ではあるんです。そういう情報の流れが速いからこそ、やっぱり背景にあるものをきちんと丁寧に伝えることが大切です。ただ易しい言葉に代えたり、あるいは文章を短くしたり漢字にルビを振ったり、あるいはひらがなにしたりという、それだけではなかなか相手にこうした情報が伝わってこないということだと思います。

当事者の取材が原稿に

今日現物を持って皆さんにお配りすればよかったんですけど、『ステージ』というのはこういう新聞です。ちょっと分かりにくいんですけどね。一面がカラーです。『ステージ』と書いてありますね。きれいな写真を使って、みんな興味があるので、環境関係の記事が一面にいくことが多いですね。一面は、どういう新聞を作るかと協議しながら決めていきます。

これが一面ですね。これはなかなか面白かったですよね。ハンセン病の栗生楽泉園という療養所に知的障害の人たちとその支援者が何人かで視察に行き、入所している笹（こだま）さんという男性にインタビューした記事なんです。ハンセン病の療養所に訪ねて行って笹さん

から話を聞くわけです。インタビューしたのは軽い知的障害の女性ですけど、彼女がこの筋さんからいろいろな話を聞いて夜中まで2人で話し込むんです。家族っていったい何なのかみたいなことを元ハンセン病の患者さんと知的障害の女性が語り合うんです。

筋さんというのは、自分が物心ついたところから母親に抱きしめられた経験がないんですよ。当時、らい菌というのは人に感染するんだという間違った常識で、みんな強制隔離されていたんですね。それでお母さんがハンセン病だったので、自分の子供にうつしてはいけないうと、子供とは接触できないということで何となく抱っこされた経験がないんですね。筋さんというのは非常に寂しい幼少期を過ごしたんです。そうしたら小学生のころですかね、自分もハンセン病を発症しているということが分かったんです。分かって強制隔離収容所に入れられたと思うんですね。それでお母さんは絶望するんですけど、その時に初めて抱きしめてもらえたというんですね。もううつす心配がないからですね。もともとハンセン病になっているのでいいだろうということで抱きしめて泣いたというんです。お母さんとね。その時彼は自分がハンセン病を発症したということが分かったんだけど、お母さんに抱きしめられたことのほうがうれしかった。隔離された施設の中でもお母さんと一緒だから、そちらのほうが自分はうれしかったと言うんですよ。そういうことを、やっぱり僕らじゃそういう領域まで彼と話していて深まっていかないんです。その辺に僕は技術よりもテクニックよりも人と人とのコミュニケーションといいですか、相手のもっとも心の奥に沈んである感情だとか意味だとか、そういうものを伝えられる、あるいは共有できるみたいな、その辺のヒントが書かれているんじゃないのかなと思います。

『ステージ』の編集委員をしている知的障害の女性2人が、去年の11月にメキシコで行われた育成会の世界大会、世界中から知的障害の家族や支援者や本人たちが集まってきたのにこの2人は行って、この『ステージ』を発表したんです。彼女は一番最後に、私が心に残った取材の経験をお話ししたいということで、このハンセン病療養所に行ったことを発表したんですが、世界中の人たちから大絶賛されたそうです。『ステージ』は飛ぶように、みんな各国の人が「私にも1部くれ、1部くれ」ということであつという間になくなって、今年の7月ですかね、ポーランドでヨーロッパ大会が開かれましたけれども、是非ヨーロッパ大会でも日本の知的障害の人たち

への情報提供の実践を報告してくれということで、招待が来たくらいに、世界中の人たちに感動を与えました。

新聞「ステージ」の記事は④ 科学と経済に関して

ちょっと戻りますけれど、例えば科学の記事もとても難しいんですね。それを彼らに教えてくれって、クローン人間というのは何ですかって、これは何年か前に話題になった話ですけども、こういうのも分かりやすくなっているんですね。これは本当に難しいんですよ。「新興宗教団体ラエリアン・ムーブメントがクローン人間作りを目的にして設立したクローンエイド社のブリジット・ボワセリエ博士は、27日、米フロリダ州ハリウッドのホテルで記者会見し26日にクローン技術による女児が初めて誕生したと発表した。女児がクローン人間であることを裏付ける科学的データは公表しなかった。」とこういう記事なんですけども、これは『ステージ』では「世界で初めてのクローン人間が生まれたとクローンエイドという団体が発表しました」、こんなふうになっていくんですね。

あと経済ですね。実は科学記事よりも政治記事よりも、何よりもこの経済の記事って難しいんです。僕らが読んでいても全然分からないんです。これは実際に何年か前の記事です。現実の新聞に載った記事なんですよ。「政府は12日、日銀と一体でデフレ克服に乗り込むため、福井俊彦日銀次期総裁と塩川正十郎財務相、竹中平蔵金融経済担当相ら経済閣僚、福田康夫官房長官などのとの定期会合を新設することを掲げた。今月20日、福井新体制の発足直後にスタートさせる。初会合ではアフガンとイラクの3月危機やイラク攻撃が始まった場合の経済混乱への対応策が焦点となる。すでに政府は日銀幹部と内閣官房や内閣府の事務レベルで非公式協議を進めてきた。12日午前には首相官邸で内閣財務相、経済産業相、金融庁事務次官、長官と日銀による会合を初めて開催。株価や各市場の現状などについて意見交換する」。全くこれは分からないですね。何がどうなっているのか、どうしようとしているのかですね。これは、デフレというものを何とかしないとイケないんじゃないかという、今となってはこんな時代もあったよねということですけども、このデフレというのを説明するのが非常に難しく、私は経済面の記者にいろいろ協力を求めたんですけどみんな尻込みしちゃって、「そんな、小学校3年生にデフレなんて教えられない」と言うんです。彼らは、最初にこういう記事を、二面、三面の記事を。経済部だと

か政治部だとか、中には社説を書く応接室に持ち込んで書いてくれと僕らがお願いに行くんです。みんな嫌だと言わないで書いてくれるんですよ。書いてくれて、それを障害のある人たちと次の研修会議で読み合わせをするんです。障害のある彼らは非常に情け容赦ないものですから「こんなの全然分からない」とか、「何を書いてあるのか意味が分からない。こんなの出している神経が分からない」とか、もうぼろくそに言っちゃうんですね。社説を書く論説委員の原稿なんてもうぼろくそですよ。「こんなんでもよく新聞記者やってるな」と言われますね。赤ペンで分からないと指摘されたものを持って論説室に訪ねて行って、「すみませんが、全然分からないと言うので書き直してもらえませんか」と言うんですね。その社説書いている人に書き直してもらったこともあるぐらいなんですよ。みんな、最初はすごくむっとします。ボランティアで協力してやっているのに分からないとはなんだと。自分だって、ずいぶん忙しい中、書いてやっているんだというようなことを言うんですね。みんな、一番カチンときて「なんだ、それは」というのは何かというと、自分自身がよく分かっていない、人にごまかしているところを突かれるわけですよ。書いている本人も実はよく分かっていないんですね。そういうふうに突かれるとものすごく嫌がるんです。僕はそうでした。「なんですか、その意味は」とすかさず本質的なところを突いてくるんです。それを一つくぐり抜けると、この『ステージ』の新聞作りにみんなはまっちゃうんです。これまで11年ありますけれども、どれくらいの記者が協力してくれたのかという、全部署名を付けますから数えてみたことがあるんです。そしたら写真のカメラマンを含めてですけども、全部で百数十人協力してくれました。嫌だと言って断られたことはないですね。「忙しいからちょっと勘弁してね」と言われたことは何度かありますがね。あとは大体どの人にも、記者にも「悪いけど書いてくれない？」と言うと「いいですよ」と言って書いてくれます。「ここが分からないから書き直して」と言うのと大体みんな嫌がりますけどね。

このデフレはみんなひいちゃって、しょうがないから僕の同期で今経済部のデスクをやっている彼にこのデフレのことを書いてもらった。それがこういう記事なんですよ。「デフレとはずっと物価、物価というのは物の値段のことですが、下がり続けることです。ハンバーガーや牛丼などがどんどん安くなっています。これはいいことなのですが、なぜデフレは悪いのでしょうか。物価が

どんどん安くなると、人々はもっと安くなるだろうと買い物を先延ばしにします。すると品物が売れません。品物が売れないと、売るほうは値段を下げて買ってもらうとします。それがまた物価の下落と買い物の先延ばしにつながります。もがけばもがくほど値段も売れ行きも落ちていきます。だからデフレは怖くてあり地獄のようだと言われます」こういう記事なんですよ。こういうもので「あ、デフレってそういうことだったんだ」と何となく分かります。よく分かっている人しか易しく書けないんですよ。分かってない人は易しく書けない。だから難しい言い回しをしたり抽象的な言葉を使うんです。

「ステージ」を通して

次に、一面が企画の面ですね。二、三面がニュースのページで、このニュースのページは我々が、毎日新聞の記者たちが全部担います。四面が芸能面、最近はテレビ番組で知的障害の人たちが主人公になるようなテレビ番組が多いですね。『光とともに……』だとか、昔、『聖者の行進』だとかいろいろなものをやりますね。そうすると、そういうのはすかさずロケ現場に取材に行ってもらいます。向こうも障害を持った本人たちが取材に来ると断れないんですよ。みんな大喜びをして帰ってきますね。最初に『聖者の行進』、知的障害者が虐待されているというテーマでやった番組、いしだ壱成さんが知的障害の役をやったんですよ。変なしゃべり方はデフォルメが過ぎたりするので、こんなしゃべり方をする障害者はいないとか障害者をバカにしているとかさんざん非難を受けたんですけども、そこに本人たちが取材に行ったら、いしださんはがちがちですね。自分が知的障害の人を演じている、まさに本物が来ちゃって、「いしださんどうですか。」なんてインタビューするんですね。大変緊張してね。でも彼はまじめに答えてましたけどね。その時に、取材に行ってもらった本人さんたちに記事を書いてもらったんですよ。感想文を書いたらね、ある知的障害者はこう書いたんですよ。「いしだ壱成さんはどこにでもいる知的障害者という感じ。とても好感がもてました」と書いてありましてね。それとか、『アルジャーノンに花束を』。障害者の役をやったユースケ・サンタマリア、彼はとっても障害者の心をつかんでいました。みんなユースケ・サンタマリアの大ファンになって、一番うれしかったってみんな言いますね。それと、この前は『筆子・その愛』という映画で常盤貴子さんが日本で初の障害者施設をつくった女性の役をやるんですよ。

そこに取材に行って帰ってきたのは知的障害の男性なんですけど、彼は知的障害あるのにと一ても不思議な人で中国語がぺらぺらなんですね。中国に一人旅を7回ぐらいやって中国大好きで、中国語ぺらぺらで、やっぱり自閉傾向があるんですかね。彼が『筆子・その愛』のロケ現場に行って帰ってきたら、もう興奮しまくって顔が真っ赤になってたんですね。「どうしたの?」と言ったら、「あんな美しい人はこの世で初めて見ました」と言って、それで「僕はラブレターを書きたいんで教えてくれ」と言って、恥ずかしそうにして書いたんです。中国語が得意なものですから難しい漢字ばかり書くんですね。言い回しなんかも難しいのですよ。

あと五面はこのスポーツ面ですね。スポーツ面も、大抵毎日新聞の運動部の記者たちが書く。それから七面、八面は、読者からの意見の募集ですね。

最終面の九面はもう一度カラーなんですね。つまり、やってみようということいろいろなことにチャレンジしてみようということですね。遊びがやっぱり多いんですね。これはワカサギ釣りに行った。いろいろなことをやりました。中で議論をよんで顰蹙をかったのが、お酒を飲んでみようってやったんですね。銀座だとかそういうところね、バーとかパブだとか赤ちょうちんなんかに飲みに行ったんですね。これは、助成金を出してくれる団体に「こういうことやったんじゃ、もうお金出せません」と言われそうだというのです。僕はたまじめなんですよ。というのは、こういう障害を持った人たちはタバコを吸ったりお酒を飲んだりすると、やっちゃいけないことをやっているみたいな、子供扱いされるんですかね。福祉のお世話になっていながらみたいな感じで言われるんですけども、彼らもれっきとした大人なんですね。やっぱり彼らと話していて一番関心があるのは恋愛ですね。仕事と恋愛ですかね。あとお金ですね。それは当然だと思います。普通の人の感覚だって異性のことだとかお金のことだとか仕事のことだとかについてやっぱり執着するのと同じようにですね。それなのに、なぜか子供扱いされて、そういうものに近づけないようにされてきたわけですね。たまには羽目を外すことだって覚えなければ、まじめに仕事をやることのつらさとかやりがいだとかも分からないし、一生懸命仕事をした上で羽目を外す。あるいはいろいろなうっぶんがたまってきたときには親しい人と飲んで愚痴を言い合ってストレスを発散する、そういうことだって、当然これからの彼らの生活の中で覚えていってもいいじゃないかと、僕らはたまじめなつも

りでやったんですね。ところが、やっぱり助成金を出す団体のことを考えている育成会の方からは、それは理解されなかったですね。「本人たちはいいけど、支援者まで一緒に酒を飲むことないじゃないか」って言われて、支援者も一緒に飲んでいる写真なんか載せちゃったものですから、それがいけなかったんじゃないかなというふうに思うわけです。

あと平仮名にするのが分かりやすいのかというと、必ずしもそうではないんですね。平仮名だらけにしちゃうと、かえって読みにくいんですね。暗号文章みたいになって。適当なところに適度に漢字があったり隙間が空いていたりというのが分かりやすいんですね。

あと二重否定というのが難しいんですね。「私は東京ドームに行きたくないわけではない」「楽しくないとは言っていない」「だからどうしても行かないと言っているわけじゃない」一体何なんだかよく分からないんです。昔はやった槇原敬之の流行歌ですね。「もう恋なんてしないなんて言わないよ。絶対」一体どっちなんだと言いたくなるんですね。しかしこれは面白くて、新宿の3丁目辺りに行きますと「分かるわー」と言うんですね。「こういう気持ち。ああでもない、こうでもない、だけどうなのよ。もうストレートに言えないのよ」と言う人たちがいるんですね。そういう文化、やっぱり言葉とか文章というのは、本当にその人たちの文化を象徴しているなと思うんですね。

実は、知的障害者の文章というものも研究したことがあるんです。すごくのりしろが多いんです。「みんなの会に参加するために飛行機に乗って東京に行きました。東京に着いてからバスに乗ってみんなの会の会場に行きました。みんなの会の会場では大阪や広島の人たちと会いました。大阪の人たちはこうである」。その一つの文と次の文と同じ言葉をつないでいくんです。のりしろみたいなものなんですけど。それがすごく多いのに気がついて。反復ですかね。やっぱり彼らの世界というのはコミュニケーション、情報のスピード感みたいなものになかなか乗れなくて、だけど一つ一つ理解を、足場を固めていくように少しずつ少しずつ前に進んで行っているんだって。彼らにとって難しい言い回しだとか文章表現よりも、むしろ、このスピード感のほうが彼らの理解を妨げているんじゃないのかなと思うことが時々あります。

感情と経験の共有から

今日は知的障害の人たちの、特に文字情報、読んで理解をどうやって促す試みをしているのかということをお話ししましたが、私は主に知的障害の人たちの権利擁護みたいなことについて、10年ぐらい取り組んできているんです。去年、千葉県で障害者差別をなくすための条例というのが成立しました。1年ぐらいかけて、いろいろな障害の人たちと研究会を開いて、それで条例原案を作ってきたんですけど、このときに非常に勉強になりました。聴覚障害連盟が条例作りのために勉強会を開いてくれて、200人ぐらいが集まる会場に私もシンポジストとして招かれたんです。シンポジウムの前に会議室でお弁当を食べながら打ち合わせをしたんですが、私以外はみんな耳の不自由な方なんです。そうすると、お弁当を食べてからみんな手話で打ち合わせをし出したんです。僕は一人で何も分からないからじっとして、だんだん不安になってくるんです。誰かがくくっと笑ってちらっと見ると、もうなにか、いたたまれなくなってきちゃうんです。そのうちみんなはおかしそうにケラケラ笑い出したんです。僕はだんだんムカムカしてきて、「すみませんけど、手話通訳はいないんですか」と探したんです。そうなんです。どっちかが多数でどっちかが少数になったときに手話通訳は手話でその人に伝えるのか、それとも手話でやっているのを言葉によって置き換えるのかという、双方向性なんです。それを自分は気がつけなかったんです、それまでは。

それと、僕が座長をやって、目の不自由な方が副座長をやっていた時、彼はある勉強会でこう言うんです。「障害者というのは、神様のいたずらでどんな国でもどんな時代でも大体同じ割合の障害者が生まれてくる」言うんです。「だけど、もしこの町で神様のいたずらが過ぎちゃって視覚障害者のほうの人口が多くなってしまいました。さあ、そしたらこの町はどういう町になるのか皆さん想像してください」と言うんです。「そうしたら、私は目の見えない有権者のほうが多いので、この町の市長選に立候補する」と言ったんです。「多分、そうした有権者が多いから私は当選するだろう。その時の私はマニフェストにこう書きます。町の財政も厳しいし地球の温暖化も防止しなくちゃいけないので、この町から明かりをすべて撤去する。目の見えない私たちにとって明かりなんかなんの役にも立たない。なんでこんな無駄なものをのさばらせておくのか理解できない。そうしたら目の見える人たちはみんな血相を変えて、私のところに飛

んでくるはずだ。『市長、一体なんてことを言い出すんだ。あなたはいいかもしれないけど明かりを無くならせたら我々は生活できない。仕事もできない。夜なんか真っ暗なのに町なんか危なくて歩けやしないじゃないか、やめてくれ』と言ってくるはずだ。」と。市長になった私はその時にこう言います。「皆さんの気持ちも分からなくもないけれども、一部の人のわがままにはつきあいきれないんです。少しは一般市民のことも考えてください」と言うんですね。なんか面白いことを言う人だなと思ひまして、彼らは障害というとなんかできないということばかり注目しますね。目が見えない、音が聞こえない、難しいことを考えることができない、何々ができないという否定形ですよ。そうじゃなくて、どういう特性を持った人が多数でどういう特性の人が少数か、多数の人たちが少数の人たちの暮らしにくさを理解しているのかどうなのか、少数の人たちの暮らしにくさに配慮した街づくりや制度や法律などを作っているのかどうなのか、この辺に障害者と社会の間で起きる差別や偏見が生まれる原因があるんだということを彼は言いたいわけです。

僕はこれにもう感動しちゃいまして、「私は月に1回毎日新聞の二面でコラムを担当していて、今の話コラムに使わせてもらっていいですか」と聞いたら、彼はげんそうな顔をして「こんなもの新聞記事になるんですか。どうぞ」と言うので、私はその話を書いたんですね。こんなことをしゃべる人がいる。そうしたら社内では「この前は面白かったね」と何人からか言われたんですね。次の研究会の時に彼に会ったら彼が寄ってきてまして、「野沢さん、あれ本当に記事にしちゃったんだね」って言われて、僕は怒られるのかと思って「この前いいと言ったじゃないですか」と言ったら、「いいですけど、あれを書かれちゃったら私は市長選に立候補しにくくなっちゃうじゃないですか」と言うんですね。この人は本当になんて言いますか、目は見えないけれども洞察力に富んだ視野の広さというのは独特のものがあるんですね。

いつも研究会が終わるとくたくたに疲れちゃいますね。千葉県の研究会というのは夜にやるんですよ。というのは、平日の昼間にやられちゃうと僕らみたいな現役世代はなかなか出席できないもので、仕事を終えた人は夜の県庁の会議室を開放してもらってそこで議論して、県庁職員は傍聴しているということをやっているんですけどね。終わると終電ぐらいまでお酒を飲みに行くんです。彼は白い杖をかちゃかちゃと伸ばしながら様子をうかがっているんです。僕のところにすたすたと寄っ

てきまして、「野沢さん、ところで今飲みに行く相談していませんか」と言うんですね。「なぜ分かるの?」と言ったら、「私は目の見えない酒好きなので、そういうことは分かるんですよ。私を誘うかどうしようか迷っていますね」と言うんですね。「行きましょうよ」と言うのが普通ですよ。「私は目が見えないけど酒は好きだし食べ物大好きなのね。その辺に刺身があるでしょ」って。「ににおいで分かるんだ」と言うんですね。「適当につまみを私の前により分けてくれ」と。「私は刺身に目がない」と彼が言うんですね。どう話していいか困っちゃって「……」と言葉が出てこないのですよ。「また困ってますね」とか言われて。なんか手の上でころころ転がされちゃうような感じで、なんて言いますか、何かができないというだけじゃないんだということを、僕らはその時にすごく教えられますね。知的障害者と話していてもそうなんですけどね。

もう一つエピソードです。ある時、講演をして終わってからお弁当を食べていたら、聞いていてくれた方が寄ってきてくれて、「面白い話をありがとうございました」と言っていて、「あなたは野坂昭如にそっくりですね」と言うんです。「野坂昭如ですか」と。「漫画家の蛭子能収はよく言われるんですけど、野坂昭如は言われたことないんですよ」と。「いやあ、若いころの野坂さんにそっくりだ」って言っているんですね。目が全く見えない方だったんですね。「若いころの野坂昭如の声、特にしゃべり方の語尾がそっくりだ」と言うんですね。「へー、そうなんですか」自分は目が見えないけど人の声だとかは非常によく覚えているということですね。しかも、その感度がとぎすまされているんですよ。感心しちゃい

ましてね。

その差別をなくす研究会も、最初は全然、議論がかみあわなかったんですけども、そういうふうな何かできないというだけじゃなくて、その人のいろいろな感性、目が見えないけれども、ほかにもいっぱいいろいろな人生を背負って、いろいろな人生経験をして、いろいろな感性を持っているんだということが分かる、我々も知的障害の子を持った親なりの苦労なり、彼らによって学ばされたものはいっぱいあるということですね。こうやって融合していくと、これはものすごく、それからコミュニケーションがはかどって議論が深まっていて、言葉では言い表せないところまでお互いに思いがすーと染みこんでいくような感じで広がっていくんですね。

僕はコミュニケーションの本質というのはこのへんにあるんじゃないかなということを考えるんです。同じような価値観だとか感情ですね。悲しいとかつらいだとかうれしかったとか、そういう感情の共有がある者同士の間でのコミュニケーションは非常に広がりますね。私の子供は、言葉は全くありません。言語によるコミュニケーションはできませんけれども、ものすごく気持ちは通じ合えますね。これは今言ったみたいな感情だとか経験の共有というものが土台に、私と息子の間にあるということでした。しか説明がつかないようなものを感じます。こういったことを、不特定多数の人を対象としている新聞だとか、この『ステージ』の取り組みの中で、どういうふうに生かしていけるのかというのが、これからの私の課題だと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。